



二項対立

昨日の通信に「現代文」の話題を書いたが、面白い本を読んだので、「現代文」の授業のことに関連させながらちょっと紹介してみよう。その本のタイトルは、

『「自分の子どもが殺されても同じことが言えるのか」と叫ぶ人に訊きたい』

と、なかなかセンセーショナルなもので、書いたのは映画監督の森達也さんという人である。副題には「正義という共同幻想がもたらす本当の危機」とある。図書室から借りた本だから、読み終わったら返却するので、興味のある人は覗いてみてほしい。

で、上のセンセーショナルなタイトルであるが、森さんは死刑反対論者で、公共の場でそのことを訴えると、必ずとっていいほどこのタイトルに引用されている言葉を投げつけられるのだという。つまり、死刑に賛成する立場の人たちの合い言葉みたいなものなのであろう。さて、法学部進学を希望している諸君に聞いてみたいのだが、君たちは死刑をどう考えますか？ そして、もし死刑反対なら、上の言葉にどのように答えますか？ この本の一部を引用してみよう。

*

ネットや週刊誌などでも、死刑反対を訴える弁護士や知識人たちへの反論として、「殺された被害者の人権はどうなるんだ？」は、ほぼ常套句のように使われるフレーズだ。僕も何度も言われている。(中略)

でもこの二つ(保戸塚注：被害者の人権と加害者の人権)は、決して対立する権利ではない。どちらかを上げたらどちらかが下がるというものではない。シーソーとは違う。対立などしていない。どちらも上げれば良いだ

けの話なのだ。加害者の人権への配慮は、被害者の人権を損なうことと同義ではない。

大きな事件や災害が起きたとき、この社会は集団化を強く求める。そしてこのときに集団内部で起きる現象の一つが、周囲の環境因子の簡略化や単純化だ。九・一一後のブッシュ政権や同時代の小泉政権を振り返れば、その傾向は明らかだ。正義と悪。敵と味方。郵政民営化是と非。右と左。そして加害者と被害者。つまりダイコトミー(二項対立)だ。

発達したメディアのよって、単純化はさらに加速される。なぜならば単純化したほうが視聴率は上がり、部数が伸びるからだ。要するに雑誌の中刷り広告の見出しだ。こうして二分化された要素は、さらに濃密になりながら肥大する。正義や大義はより崇高な価値となり、悪人や悪の組織は問答無用で殲滅すべき対象となる。だから死刑存知派が増殖する。いったん始まったこの動きは、治安悪化を煽るメディアによってさらに加速する。(中略)

二項対立は概念だ。現実とは違う。現実が多面的で多層的で多重的だ。僕の中にも善と悪がある。あなたの中にもある。とても当たり前のこと。でも集団化が加速するとき、二項対立が前提になる。明らかに錯誤だ。多くの人はその矛盾に気づかない。立ち止まってちょっと振り返れば気づくのに、集団で走り始めているから振り返ることもしなくなる。

*

現代文の授業では、「二項対立」を使って読解を進める場合もある。しかし「現実とは違う」という森さんの指摘も、きちんと肝に銘じておきたい重要な視点である。